

豊竹若太夫×鶴澤清介
大曲丸一段に挑む

素浄瑠璃公演

絵本太功記 十段目

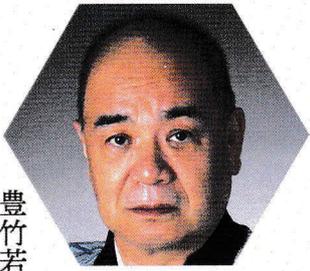
尼ヶ崎の段

浄瑠璃／豊竹若太夫
三味線／鶴澤清介

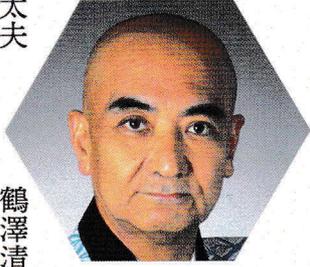
《アフタートーク》

豊竹若太夫×鶴澤清介

聞き手／早稲田大学演劇博物館館長
児玉竜一



豊竹若太夫



鶴澤清介



児玉竜一



2024年

9月12日〈木〉ひるの2時半はじまり

紀尾井小ホール（2時開場）

料金／一般5000円／学生3000円

（全席指定税込）※7月12日〈金〉予約開始

《チケット予約》「コテン」ウェブサイト coten-goten.com

《お問い合わせ》「コテン」TEL:070(84280)809-5 ※留守電対応
メール office@coten-goten.com

《主催》株式会社「コテン」 《協力》早稲田大学演劇博物館



コテンゴテン
ウェブサイト

《紀尾井小ホール》

千代田区紀尾井町6-5 紀尾井ホール5F

○「四ツ谷」(JR丸の内線・南北線)麴町口より徒歩6分

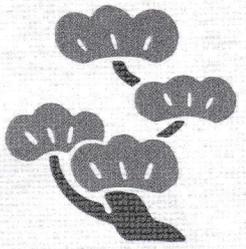
○「麴町」(有楽町線)2番出口より徒歩8分

○「赤坂見附」(銀座線・丸の内線)D出口より徒歩8分

○「永田町」(半蔵門線・有楽町線)7番出口より徒歩8分

絵本太功記 十段目

尼ヶ崎の段



本能寺で小田春永(織田信長)を討った、武智光秀(明智光秀)の末路を描く名作。熟慮と苦悩の末に踏み切った謀叛の道が、一家すべての運命を狂わせる。老母、妻、嫡子、その若妻、家族それぞれの思いが、光秀を揺さぶるクライマックスに至ります。

数ある時代物浄瑠璃の中でも、これほど多彩な人物を擁して、これほど聞きどころに富んだ演目も少ないでしょう。西暦1799年という、18世紀の最終盤で初演されたことから、それまでに開発され磨き上げられた、あらゆる語りと作曲の技法が盛り込まれた大曲です。

近年の文楽での上演では、十次郎と初菊を中心とする前半と、光秀を中核とする後半で、太夫と三味線を分けてしまうことが多いようですが、本来は一人で語り通すべき、これぞ紋下級の語り物でしょう。

いまや斯界を牽引する豊竹若太夫は、由緒ある名跡の十一代目を継承して、祖父十代目の「命がけの浄瑠璃」の再生に意欲を燃やしています。定評ある語り分けと詞の伶俐さに加えて、圧倒的で重厚な貫録をめざして、更なる進化が期待されます。若太夫を支える鶴澤清介もまた、鋭利繊細な表現から豪快華麗な切れ味まで、定評のある表現力が多彩な聞きどころを活かしてくれるものと期待されます。

演奏後には、うってかわって軽妙な話術に定評あるご両人の、アフタートークをお楽しみいただきます。

出演者プロフィール

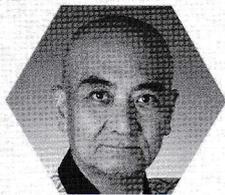


Toyotake Makatayu

豊竹若太夫

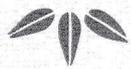


1967年三代竹本春子太夫に入門、祖父十代豊竹若太夫(人間国宝)の幼名の豊竹英太夫と名のる。後に四代竹本越路太夫(人間国宝)の門下となる。祖父・若太夫の血と、師匠・越路太夫の芸を受け継ぎ、早くから期待を集めてきた。明治初めから続く重要な名跡である豊竹呂太夫を襲名以後、自らの立ち位置を確立し、満を持して2024年4月、十一代目豊竹若太夫を襲名。文楽界では若太夫は竹本義太夫に次ぐ大名跡であり、祖父の名前でもある若太夫の名前を五十七年ぶりに復活させ、先頭に立つて文楽座を牽引する意欲に燃えている。



Tsurusawa Seisuke

鶴澤清介



1973年二代鶴澤道八に入門。翌1974年鶴澤清介と名のり、朝日座において初舞台。剛柔兼ね備え、時代物から世話物まで幅広い芸域の持ち主。また、古典のみならず新作文楽の作曲にも才能を発揮。2012年現代演劇の第一線で活躍している三谷幸喜が初めて文楽に書き下ろして話題を呼んだ『三谷文楽 其礼成心中』(それなりしんじゅう)の作曲も手がける。演奏後の座談会ではどこまでも続くかと思わせる話術も聞き物で、文楽三味線の魅力を語る稀有な語り部としても貴重な存在である。



早稲田大学演劇博物館館長

児玉竜一



兵庫県生まれ。早稲田大学教授。早稲田大学卒業、早稲田大学大学院から、早稲田大学助手、東京国立文化財研究所、日本女子大学などを経て現職。専門は日本演劇研究と評論。編書に『能楽・文楽・歌舞伎 日本の伝統芸能への誘い』(教育芸術社)、共編著に『カブキ・ハンドブック』(新書館)、『映画のなかの古典芸能』(森話社)など。「朝日新聞」で歌舞伎評担当。国立劇場研修事業講師(文楽・歌舞伎・歌舞伎竹本)。2013年より早稲田大学演劇博物館副館長を経て、2023年より館長。

